

平成30年度「若手教員等研究支援費（若手教員等支援枠）」研究成果報告書

| | | | |
|---|--|----------|--|
| 研究課題 | 初等教育における歴史的思考力育成の論理の解明—教科書記述と使用法の課題に焦点を当てて | | |
| 氏名 日高智彦 | 所属 人文社会科学系社会科教育学分野 | 職名 講師 | |
| CITI Japan 研究倫理 e-ラーニングプログラムの受講 <input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること | | | |
| <p>【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）</p> <p>主に戦後に発行された小学校社会科歴史的分野の教科書に広く当たることによって、1950年代から一貫して、小学校教科書には学習者の思考を促すためのメタ・ディスコース（本文の記述に対し、目的を持った読みを促すための諸記述の総体）が書き込まれていることを確認できた。しかし、そのメタ・ディスコースが学習者に促そうとする思考の性格は、おおまかにいって、1970年代後半を境に変化する。これ以前は、教科書で扱う日本の歴史上の時代区分ごとの変遷（推移や展開）に着目させ、かつそれぞれの時代の特徴を現在と比較したり関連付けたりして考えさせるようなメタ・ディスコースが多かった。しかしこれ以後は、メタ・ディスコースの語り手が「児童」を想定したものに変わり、本文記述のまとめ（要約）を作成したものの発表という形のページになっていった。それに合わせて、学習者への問いかけも、教科書記述にあらわれる推移や展開を「どのように(how)」とたずねる形のものが増加していった。一方、パラ・ディスコース（本文の記述への付加的な情報の総体）については、基本的に増え続けている。とりわけ、教科書が縦書きから横書きへと変化する1990年代（第6次改訂）以降の充実が顕著である。さらに、この第6次学習指導要領改訂によって、小学校歴史学習では、人物に着目した学習が求められるようになった。このため、教科書にも、歴史上の人物の気持ちについて説明するパラディスコースや、気持ちはどうだったかを想像させるメタ・ディスコースの記述が目立つようになった。</p> <p>1990年代後半に日米の小学校の歴史授業を観察・分析した渡辺雅子は、日本の歴史教育の特徴として、「どのように(how)」と問うこと、この問いによってさまざまな因果関係の総体としての歴史の変化（推移や展開）をつかませようとしていること、そして、そうした変化の中にある人物が抱くであろう気持ちを「どのように(how)」と考え共感的に理解することが、この変化をよりよく理解できる方法であるとする信念を教師も児童も受け入れていること、を指摘した（渡辺雅子『納得の構造』東洋館出版社、2004年）が、本研究で明らかにした現行の教科書記述の特徴も、この分析に当てはまっていると言えよう。例えば、時間の推移や展開に関して「どのように(how)」と問うのは、直接的な因果関係よりも多様な状況に着目させるためであるから、パラ・ディスコースは多いほど良いということになるからである。</p> <p>一方、歴史上の人物の気持ちを共感的に理解すれば、そのような時間の推移・展開に関する因果関係（なぜそうなったか）が理解できるとする信念は、結果として、授業において教科書という教材を軽視することにつながることも、本研究のなかで分かってきた。「気持ち」は、その状況に置かれた人間であれば誰もがそう考えるであろうという想像上の気持ちであって、事実を示す資料等から読みとることとは異なるため、根拠となるものを調べるような思考を要求するものではないからである。実際、複数の学校で授業を観察した際、歴史上の人物の気持ちを考えさせる際に、教科書をその根拠として使用していた授業はなかった。よって、このような授業では、児童がいかに人物の気持ちを我が事として考えようが、さまざまな状況を視野に入れようが、歴史の推移については、教科書記述（や教師の説明）が設定した一つの筋道以外に学ぶ余地はないものとなっている。これでは、歴史学習の可能性としては、限られたものになっていると言わざるを得ないだろう。</p> <p>しかし、例えば、複数ある因果関係のなかでどれをより重視するか、複数ある要因のうち、ある要因を重視した際と、別の要因を重視した際とでは、その歴史の評価が異なるのではないか、等々といった歴史学習の可能性は、現行の教科書記述をもとにしながら、授業での活用の仕方自体で開けてくるだろう。現行の多様なパラ・ディスコース記述を前提に、その中に軽重をつけさせたり、矛盾を見出させたりすることは、不可能ではないからである。これはまだ仮説の段階であるが、本研究の成果である。</p> | | | |
| <p>【研究成果発表方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日高智彦「『歴史的に考えること』の学び方・教え方」（南塚信吾・小谷汪之編『歴史的に考えるとはどういうことか』ミネルヴァ書房、2019年5月出版予定）。 ・日高智彦「小学校における歴史教育の課題—その所在を考える」（総合歴史教育研究会第54回大会研究発表、2018年9月1日@桜美林大学四谷キャンパス） | | | |

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。